



小林久敬は、安積疎水の必要性を強く明治政府に訴え、その実現に尽力し、現在の郡山市の基礎を築いた人物として、広く知られています。しかし、その生涯は、決して幸せなものではなく、波乱に満ちていたことが、多くの文献から明らかになっています。

文政4年(1821)、須賀川の中町で町役人を務めていた小林久長の次男として生まれた久敬は、天保の大ききんを機に、幼いころ、父に連れられ訪れたことのある、猪苗代湖から、安積平野、そして岩瀬地方へと、湖水を引けば、多くの人々を救うことができるのではないかと考えるようになりま

す。そして、その思いはますます強くなり、30歳の時には、猪苗代湖と岩瀬地方が一望できる斉木峠に立ち、「必ず須賀川まで引くことができる」と確信しています。久敬は、この峠近くにトンネルを掘れば、高度的に自然流水が可能であり、かつ経済的にも時間的にも最良の策であると考えていたのです。

した久敬は、安積地方の人たちの賛同を得ることに成功し、全財産を注ぎ込んで、測量を行うなど、用水路づくりに打ち込みました。

ところが、明治12年、安積疎水工事に着手した政府と県は、失業した武士を熱海地区などへの開墾により救うため、久敬の斉木峠案ではなく、沼上峠への工事を進めていきます。そのうえ妻子にも見放された久敬は、失意のもと、わずかに残っていた郡山の土地にあらばら屋を建て、一人住み着き、疎水工事の現場で様々な進言を行います。聞き入れられませんでした。しかし、この工事は、オランダからの招へい技師・ファンデルンの指揮の下、順調に進められ、わずか4年の短期間で安積平野へと通水したのです。形はどう

あれ、通水式で、水門が開かれ、湖水が安積平野へと流れると同時に、30数年間、私財を費やし、情熱を注いだ久敬の悲願が、ついにかなえられたのです。そしてその2年後、郡山のあばら屋で、わずかな土地を耕し、自給自足の生活を営んでいた久敬は、その疎水実現への情熱と見識が、ついに政府に認められ、民間功労者として、新宿御苑の宴に招かれ、明治天皇から銀杯を賜るとともにその労をねぎらわれました。晩年は、病気がちとなり、不自由な生活を送っていました。不自由な生活を送っていました。不自由な生活を送っていました。

この斉木峠案を実現するため、久敬は、先祖代々の土地を元手に資金を集め、それでも足りない分は、地元有力者たちにお願いました。しかし須賀川の有力者たちには、「途方もないことを」と取り合ってもらえないばかりか、「斉木峠案では、須賀川まで水が来ないのでは」と懸念する多くの人たちから、強く反対されてしまいました。それでもあきらめずに奔走



須賀川の牡丹園を語るうえで、最も重要な人物が、柳沼源太郎です。もともとこの牡丹園は、明和3年(1766)、須賀川の葉種商「伊藤祐倫」が、牡丹の苗木を葉用のために、現在の兵庫県宝塚市から買い求め、栽培したことが始まりと言われています。そして明治時代の初め、この牡丹園が伊藤家から柳沼家に譲渡され、葉用目的のものが鑑賞用へと切り替わることになったのです。

源太郎は、須賀川町の2代目収入役で、中町の商家「糸八木屋」の経営者・柳沼信兵衛の長男で、信兵衛亡き後、牡丹園経営を引き継ぎました。現在の牡丹園の名声を築き上げた人であり、その取り組みには寝食を忘れる程であったと言われています。

明治8年生まれた源太郎は、牡丹園の経営を軌道に乗せるには、専門的な栽培の勉強をしなければと、15歳の時に上京し、開成中学を経て東京農家大学に学び、そして帰郷後は、家業の糸八木屋を弟に任せ、自分は牡丹園に移り住み、牡丹栽培一筋に励みます。牡丹の時期に満足のいく見事な花を見せるには、ただひたすらに、四季を通じて手入れするしかない、作業員たちとともに励み、特に冬の手入れを怠らかったと伝えられています。また、源太郎は、牡丹栽培に精力を傾ける一方で、俳人とし

ても優れた才能を発揮し、大正時代には、原石鼎の門に入り、破籠子の名で数々の名句を残しています。例えば、牡丹園内に建立された源太郎の胸像に刻まれている、「園主より 身は芽牡丹の 奴かな」という句は、「人は私のこと」を牡丹園の園主と呼ぶが、そんなおごり高ぶった気持ちはなく、愛らしい芽牡丹に心から仕立てている一人に過ぎない」という牡丹を愛する心を表現しています。

そして昭和7年、この牡丹園は、文部省からその価値が認められ、国の「名勝」の指定を受けることになったのです。しかし、不況が続いた当時は、牡丹園も例外ではなく、経営難の苦境に立たされてきました。現に源太郎は、経営補助申請と、町への移譲の願書を提出していますが、町でもこの総面積8.64haの牡丹園を管理運営することは、財政上大変困難な時代でした。幸いにも、柳沼家には資産家が多く、一族共同で手を取り合い、この難局を切り抜けました。

牡丹園に一生を捧げ、また俳人としても活躍した源太郎は、その美しさを後世へと引き継ぎ、昭和14年、64歳でその生涯を閉じました。そして、昭和32年に財団法人化を経た牡丹園は、その後も源太郎の心とともに受け継がれ、国の名勝として現在に至っています。

〔成長期〕

- 昭和49年 (1974)
 - 2月 稲田公民館新築落成
 - 3月 うつみ保育園・ぼたん児童館開設
 - 11月 市制20周年記念式典
 - 2月 小塩江公民館新築落成
 - 3月 横山土地画整理事業に着手
 - 9月 (財)坂本鉄蔵育英会設立。坂本鉄蔵氏を本市初の名誉市民に推戴
- 昭和51年 (1976)
 - 4月 澤田三郎氏市長当選(通算4期目)
 - 6月 仁井田公民館新築落成
 - 6月 牡丹台水泳場完成
- 昭和52年 (1977)
 - 4月 広域消防本部と須賀川消防署が丸田町地内の新庁舎に移転。西一小新築落成
 - 6月 西袋公民館新築落成
 - 10月 優良都市として自治大臣賞を受賞
 - 11月 休日夜間急病診療所開設
- 昭和53年 (1978)
 - 3月 墓地公園に302区画の墓地完成
 - 11月 都市総合交通規制を実施
 - 7月 東公民館新築落成
 - 6月 勤労青少年ホーム・武道館開設
- 昭和55年 (1980)
 - 4月 澤田三郎氏市長当選(通算5期目)
 - 11月 歴史民俗資料館開設
- 昭和56年 (1981)
 - 3月 市の第二次総合計画を策定
 - 4月 須賀川卸センター完成
 - 5月 文化センター新築落成。市民憲章・市の木「赤松」・市の花「牡丹」を制定
 - 8月 老人福祉センター新築落成
- 昭和57年 (1982)
 - 2月 福島空港建設地が「須賀川東」に決定
 - 4月 柏城小新築開校。労働福祉会館新築落成。上水道の第3次拡張事業に着手
 - 6月 東北新幹線大宮・盛岡間開業
- 昭和58年 (1983)
 - 4月 市民温泉新築落成。並木町運動場開設
 - 6月 須賀川駅前土地画整理事業に着手
 - 7月 市民の森開設
 - 8月 畜場新築落成